

1万人調査から読み解くファイナンシャル・ウェルビーイング ～FWB スコアと属性から行動まで～

MUFG 資産形成研究所研究員 小澤 良祐



～要旨～

ファイナンシャル・ウェルビーイング（FWB）とは、現在から将来に亘る個人の経済的状況に満足・安心できている状態であり、金融教育・金融リテラシー向上が目指すゴールである。本稿では企業勤務者にアンケート調査を行い、FWBを達成するための6分野からFWBをスコア化した。FWBスコアと経済的属性に着目すると、保有資産額がFWBと密接に関係していることが示唆された。6分野のスコアに着目すると、現在の家計の運営状況（家計管理）と、将来に向けた資産の見通し（資産達成度）が、安心感につながることを示唆された。一方で、将来に必要な費用の把握（生活設計）は安心感を低下させる方向に影響していることも示唆された。将来に向けて情報を得るだけでなく、それを達成する見通しが立つことが重要なようである。FWBスコアと金融行動・関心との関係を見ると、FWBが高い層は投資行動が積極的であり、資産の活用に興味が移っている層である一方、FWBが低い層は自身の現状把握が不十分であり、関心も低い層であることがわかった。

1. はじめに

(1) 金融教育・金融リテラシーのゴールとしてのFWB

2000年代中頃から金融リテラシーの向上や、そのための金融教育の実施を国家戦略として捉える機運が世界的に高まってきた。こうした機運には、雇用環境の変化や少子高齢化などから個人による資産形成の重要性が高まったこと、金融商品の複雑化とそれに伴うリスクの増大といったことが背景にあった。加えて2008年からの金融危機では、金融リテラシーの低さが社会に負の波及効果をもたらすことが指摘された（OECD, 2012）。このように重要性が認識された

金融教育と金融リテラシーについて、経済協力開発機構（OECD）では次のように定義している（Atkinson & Messy, 2012）。

・金融教育とは、個人が金融商品や金融の概念についての理解を深め（中略）ファイナンシャル・ウェルビーイングと保護を高めるために、効果的な行動を取るためのスキルと自信を身につけるプロセスである

・金融リテラシーとは、金融に関する健全な意思決定を行い、究極的には個人のファイナンシャル・ウェルビーイングを達成するために必要な、金融に関す

る意識、知識、技術、態度及び行動の総体である

このように金融教育とそれによる金融リテラシー向上の最終的な目標は、ファイナンシャル・ウェルビーイング（Financial Well-Being, 以下FWB）を達成することにある。

（2）どのような状態がFWBか

それでは、金融リテラシーを向上させればFWBは達成されるであろうか。一面においては正しいだろう。適切な知識とそれにもとづく判断・行動ができなければ、「Well（良い）」な状態とは言えないからである。一方で、そもそもFWBとはどういう状態であるか、十分な議論がなされていなかったという側面もある。そこで2010年代後半から2020年代にかけて、FWBについて定義し、それを達成することが各国政府・民間で意識されるようになってきた。ここで各機関での定義を整理してみる。

米国消費者金融保護局（CFPB）：現在および将来の金銭的債務を果たすことができ、将来の金銭面に安心感があり、人生を楽しむ選択ができる状態（CFPB, 2015; CFPB, 2017）

英国金融年金サービス局（MaPS）：安心とコントロールできていると感じること。つまり、日々の支払いができ、不測の事態に対処でき、経済的に健全な将来への軌道に乗っていることがわかること。簡単に言えば、自信と能力がある状態（MaPS, 2020）

金融経済教育推進機構（J-FLEC）：自らの経済状況を管理し、必要な選択をすることによって、現在及び将来にわたって、経済的な観点から一人ひとりが多様な幸せを実現し、安心感を得ら

れている状態¹⁾

各定義に共通する要素は「現在と将来の時間軸があること」「金銭の管理ができていること」「選択ができること」「安心感があること」といったものが挙げられる。またMaPSの定義に特に表れている特徴として、自身の状況についての「認識」が意識されている。コントロールできているのみではなく、コントロールできていると「感じる」のである。正しい知識を持っているかどうかではなく、自身がうまくいっていると認識できること、いわゆるメタ認知的側面が含まれていると言えるだろう。

このようにFWBの定義が議論されるとともに、FWBを測定する指標の開発も行われるようになってきた（CFPB, 2015; CFPB, 2017; ANZ, 2018; ANZ, 2021）。それまで使用されてきた他の指標は、知識や計算能力、金融行動を評価したものであり、経済生活に対する自身の見方というのが考慮されていなかった。そのため金融教育プログラムの評価や、FWBの観測には不十分と考えられたのである（CFPB, 2017）。

オーストラリア・ニュージーランド銀行（ANZ）ではFWBをスコア化することに加えて、定点観測として毎月スコア測定を行っているのが興味深い。2024年12月の四半期レポート²⁾によると、2022年初頭から2023年末まで、オーストラリアにおけるFWBが大きく低下してきたことがわかる。背景には物価の上昇があると考えられているが、同時期に金融リテラシー（特に知識）を測定していた場合、このような変化は見られなかったのではないだろうか。経済状況の変化が即座に金融リテラシー（特に知識）に影響するとは考えづらいからである。FWBを可視化することは、金融リテラシーに加えて社会経済なども影響した、個人・国民の主観的な

状況を把握することに有用と考えられる。

本稿では、アンケート調査を通じて日本における企業勤務者のFWBをスコア化し、どのような特性があるのかを明らかにしたい。

2. 調査概要

(1) 調査方法

リサーチ会社を通じたWEBアンケート調査を1万人を対象として実施した。本稿ではそのうち、企業勤務者8,500名（企業規模300人以上の企業）を分析対象とする。企業勤務者の年代および男女の構成比は、総務省「令和4年就業構造基本調査」における正規職員・従業員300人以上の企業と同分布となるように割り付けた。調査は2024年1月25日～2月1日に実施した。アンケートはFWBに関する設問を含む全33問であった。

(2) FWBの定義およびスコア化

MUFG資産形成研究所では、前述1.(2)のような事例をもとに、FWBをより直感的に理解できるよう次のように定義した。

現在および将来、お金に追われず、（お金に）人生の選択肢を縛られず、（お金の）安心感がある状態

「お金に追われていない」とは、キャッシュフローとして家計がうまく回っていること、「人生の選択肢を縛られず」とは、お金がないことで選択肢が縛られないようストックとしての資産形成に見通しが立っていること、そしてそれらがうまくいっていると感じられることで「安心感」を得られている、このような状態をFWBと定義した。これら3つの項目に「現在」と「将来」の時間軸を加え、6分野に分類した（表1）。

各分野について、2～3項目の設問を用いてスコア化をおこなった。各設問は4段階で評定され、各分野に対する満足度を6点満点、6分野の合計にもとづく総合的な「FWBスコア」を100点満点で算出した。

また、FWBスコアに基づいて4つの「FWBステージ」に分類した。FWBスコアが0点以上25点以下を「ステージ1」、25点を超過50点以下を「ステージ2」、50点を超過75点以下を「ステージ3」、75点を超過する場合を「ステージ4」と定義した。

3. FWBの基本特性

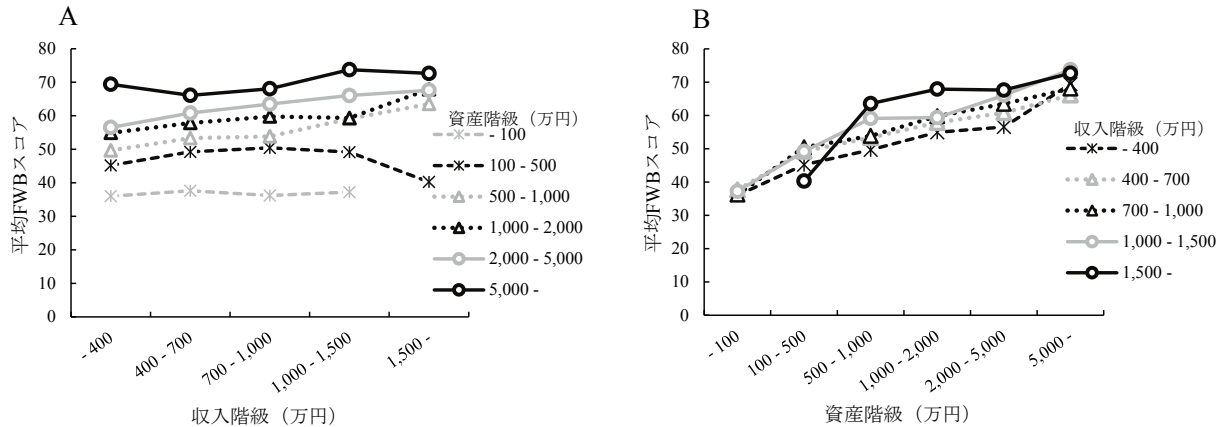
(1) FWBと経済的属性

収入や保有資産額といった、経済的属性がFWBと関係していることは想像に難くないが、実際のところどのような関係があるだろうか。

表1 FWBを構成する6分野

	家計	資産形成	安心感
現在	家計管理	生活設計	現在安心感
	家計を思うように運営できていて、ゆとりを感じるか	ライフイベントや老後生活の費用を把握できていると思うか	現在やりたいことのために経済的余裕があり、お金の心配を感じないか
将来	家計の備え	資産達成度	将来安心感
	公的制度を踏まえながら、万が一への備えができていると思うか	ライフイベントや老後生活に向けて、経済的な準備が順調と感じるか	将来やりたいことのために経済的余裕があり、費用面で心配がないか

図1 資産・収入・FWB (n = 7,089)



(A) 資産階級別に見た収入階級と平均FWBスコア、(B) 収入階級別に見た資産階級と平均FWBスコア。

個人年収を尋ねた収入階級³⁾とFWBスコアには正の相関 ($r = .35, p < .001$)、保有資産額を尋ねた資産階級⁴⁾とFWBスコアにも正の相関 ($r = .50, p < .001$)が見られた。すなわち、収入も保有資産も多いほどFWBスコアが高い傾向にある。

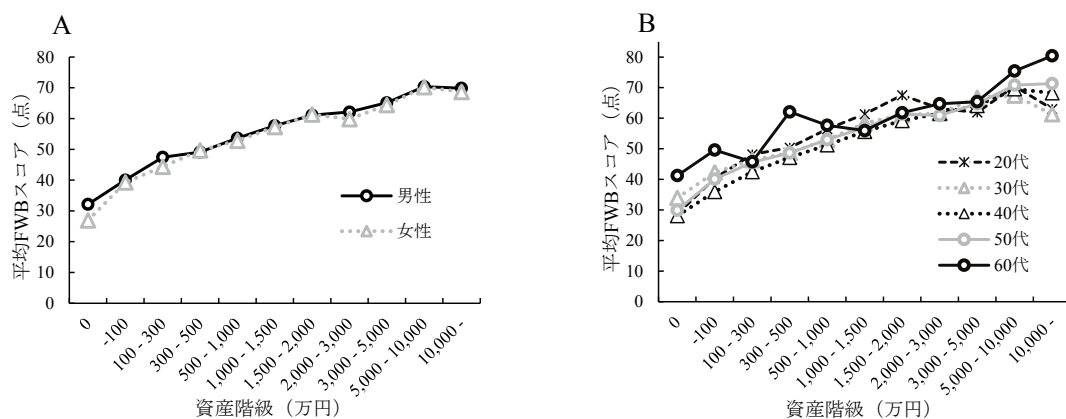
収入と資産の両面からFWBスコアをみることで、より興味深い実態が浮かび上がる。図1(A)は収入階級とFWBスコアの関係、資産階級ごとに表したグラフである。資産階級が同じであれば、収入階級が上がってもFWBスコアは微増であることがわかる。図1(B)では、資産

階級とFWBスコアを、収入階級ごとに表している。どの収入階級においても、資産階級が上がるにつれFWBスコアが上昇していくことがわかる。このように見ると、収入が増えることとFWBスコア向上にはあまり関連がなく、保有資産額が増えることとFWBスコアが向上することに密接な関係があることがわかった。

(2) FWBと個人属性

3.(1)で見られた資産とFWBの関係について、性別や年代といった個人属性による違いはあるだろうか。

図2 属性・資産・FWB (n = 7,201)



(A) 資産階級別に見た収入階級と平均FWBスコア、(B) 収入階級別に見た資産階級と平均FWBスコア。

図2は資産階級とFWBスコアの関係性を、性別(A)および年代別(B)に表したグラフである。性別・年代問わず、資産とFWBスコアには同じような傾向が見られた。詳細に見ていくと、20代と60代は同じ資産階級に対してFWBスコアがやや高い傾向にある。しかしながら全体的な傾向としては、資産階級とFWBの関係に大きな違いはないようである。

4. FWB 構成要素の関係性

(1) FWB ステージの変化と分野別スコア

ここまで、FWBの総合的なスコアと属性との関係を見てきた。続いて、FWBを構成する6分野の関係性を検討する。

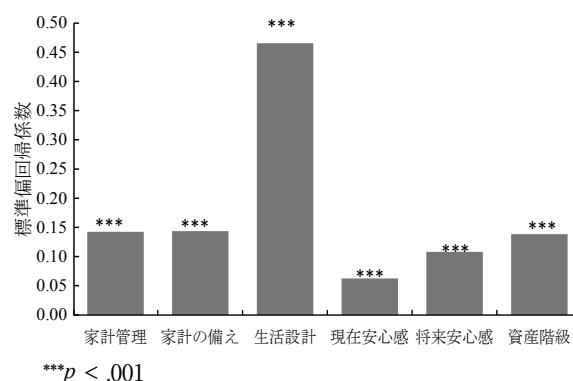
表2は、FWBステージごとのFWBスコアと6分野のスコアの平均値、およびそれらのスコアをステージ1とステージ4で比較した変化倍率を表している。ステージ1においては、資産達成度と家計の備えが低くなっている一方、ステージ4では両者ともに大きく向上している。つまりライフプラン実現に順調であること、不測の事態に家計が備えられていることといった時間軸的に将来の項目への実感を持っていることが、FWBが高い人の一つの特徴であるようだ。

中でも資産達成度は、際立って大きく向上している。そこで、資産達成度とその他の分野との関係を分析するため、「資産達成度」を従属変

数とした重回帰分析をおこなった。独立変数には「家計管理」「家計の備え」「生活設計」「現在安心感」「将来安心感」、さらにFWBスコアとの関連が見られた「資産階級」を用いた。

重回帰分析の結果、モデル全体は統計的に有意であり($F(6, 7194) = 1552.93, p < .001$)、補正済み決定係数 $R^2 = .56$ であった。図3は各従属変数の標準偏回帰係数⁵⁾を表している。生活設計の係数が特に大きくなっていることがわかる。ライフプラン実現に向けて順調であるという実感には、資産以上に生活設計、すなわち将来必要となる資金への理解が重要であることが示唆された。まずは必要な見立てがわからないと、順調かどうか判断できないといったことが推測される。

図3 資産達成度を従属変数とした重回帰分析 (n = 7,201)



*** $p < .001$

表2 FWB ステージと分野別スコア (n = 8,500)

FWBステージ	FWBスコア	家計管理	家計の備え	生活設計	資産達成度	現在安心感	将来安心感
ステージ1	17.12	1.71	0.90	1.17	0.47	0.96	0.95
ステージ2	40.69	3.05	2.79	2.49	2.03	2.19	2.10
ステージ3	61.72	4.42	4.60	3.59	3.58	3.12	2.89
ステージ4	83.39	5.52	5.81	4.73	5.23	4.48	4.26
平均	53.96	3.89	3.87	3.18	3.03	2.81	2.65
変化倍率	4.87	3.23	6.44	4.03	11.15	4.65	4.49

変化倍率 = ステージ4におけるスコア ÷ ステージ1におけるスコア。

(2) 安心感向上につながる要因とは

FWB ステージごとに見たときのもう一つの特徴として、キャッシュフロー（家計）やストック（資産）面のスコアに比べると、安心感のスコアが低めであることがわかる（表2）。ステージ4においても向上する余地が大きい要素とも言えるだろう。そこで、安心感の向上を経済的側面の満足度から考察するため、「現在安心感」と「将来安心感」それぞれを従属変数とした重回帰分析をおこなった。どちらにおいても、独立変数には「家計管理」「家計の備え」「生活設計」「資産達成度」「資産階級」を用いた。

「現在安心感」を従属変数としたモデル全体は統計的に有意であり（ $F(5, 7195) = 583.25, p < .001$ ）、 $R^2 = .29$ であった。「将来安心感」を従属変数としたモデル全体も統計的に有意であり（ $F(5, 7195) = 456.05, p < .001$ ）、補正済み決定係数 $R^2 = .24$ であった。図4は各従属変数の標準偏回帰係数を表している。現在・将来の安心感どちらにおいても、家計管理と資産達成度の係数が大きくなっている。キャッシュフローの観点では現状がうまくいっていること、ストックの観点では将来的な見通しに自信を持てることが安心感につながるようである。

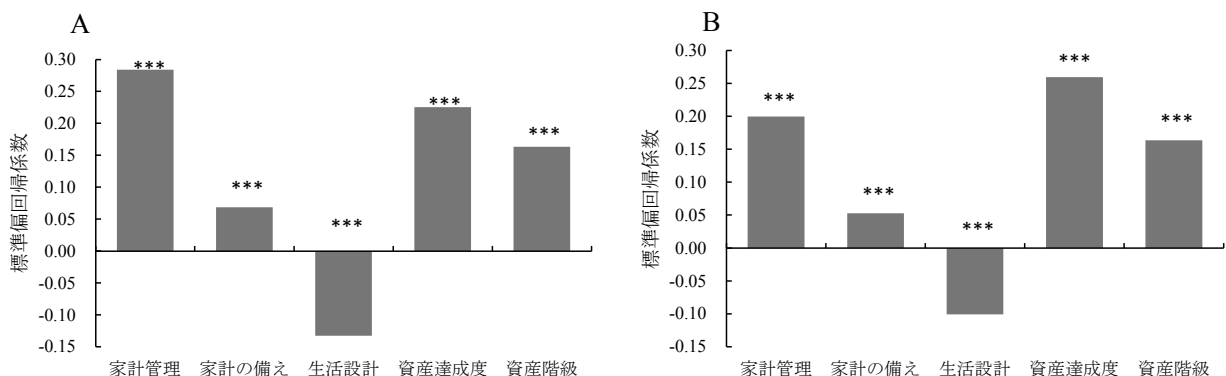
また、安心感において特徴的なのは、生活設計が負の係数になっている点である。すなわち、

生活設計は安心感を低下させる方向に影響していることも示唆された。将来に必要な費用を把握するだけでは不安になってしまう可能性があるということである。これは2019年の「老後2,000万円問題」と同じような構図ではないだろうか。金額を把握しても、それが自分に達成できると思えなければ、結果として不安になってしまうということであろう。

しかしながら、生活設計が不要かと言えばもちろんそうではない。図3で見てきたように資産達成度向上に重要な役割を果たしている。生活設計を踏まえて、それを達成する見立てが立っている＝資産達成度が高い状態へとつなげて初めて安心感を向上させられると言えるのではないだろうか。

ここまでの資産達成度と安心感についての分析では、資産階級も独立変数に用いてきた。資産階級の上昇は各スコアを向上させる要因ではあるものの、最も影響が大きい要因ではなかった（図3、図4）。保有資産額そのものというよりも、資産が増えていくような行動ができていることが重要であり、保有資産額は結果として増えていくものであるのかもしれない。また、資産がいくらあったとしても、それが十分なものかわからなければ不安は付き纏うものであるということなのかもしれない。

図4 現在安心感および将来安心感を従属変数とした重回帰分析(n = 7,201)



(A) 現在安心感を従属変数とした場合の標準偏回帰係数、(B) 将来安心感を従属変数とした場合の標準偏回帰係数。*** $p < .001$

5. FWB と関心・行動

(1) FWB ステージによる関心の違い

本節では、金融に関する具体的な意欲・行動から FWB について考えてみたい。図 5 は「資産形成・ライフプラン、資産運用に関して学びたいこと（複数選択可）」という設問において、各選択肢の選択率を FWB ステージごとに表したものである。ステージによる違いから、3つの特徴が見られた。

①ステージ 4 において選択率が大きく下がっている選択肢「生命保険」と「資産形成制度」

ステージ 4 は FWB が高く、不測の事態への備えや将来への準備が順調なグループである。そのため、生命保険や資産形成制度といった部分はすでに理解が進んでいる可能性がある。

②ステージとともに選択率が上昇し、特にステージ 4 で大きく向上している選択肢「相続・贈与」

①も加味して考えると、ステージ 4 では資産の形成から資産の活用へと興味移っている様子がうかがえる。ただし年齢構成にも注意が必

要である。図 2 (B) で見たように 60 代の FWB は高い傾向にあり、加えて保有資産額の多い人の割合も増えるため、FWB が高い人が多くなる。ステージ 1 のうち 60 代は 0.73% であったのに対して、ステージ 4 のうち 60 代は 8.07% であった。ステージ 4 は 7 ポイント以上 60 代が多く、「相続・贈与」への関心が高い要因の一つであろう。それでも、ステージ 1 から 4 で「相続・贈与」の選択率は 20 ポイント近く伸びており、ステージ 4 は資産活用への関心が高い層ではないだろうか。

③ステージ 1 での選択率が突出している選択肢「学びたいと思わない」

ステージ 1 は FWB が低いだけでなく、金融への関心もあまり高くない層と言えるだろう。

こうした関心の特徴は、実際の行動にも表れているようである。図 6 は「マネープランに関する制度や商品等について、活用（加入）しているもの（複数選択可）」という設問において、各選択肢の選択率を FWB ステージごとに表し

図5 FWBステージ別に見た資産形成等に関する学びたい内容（n = 8,500）

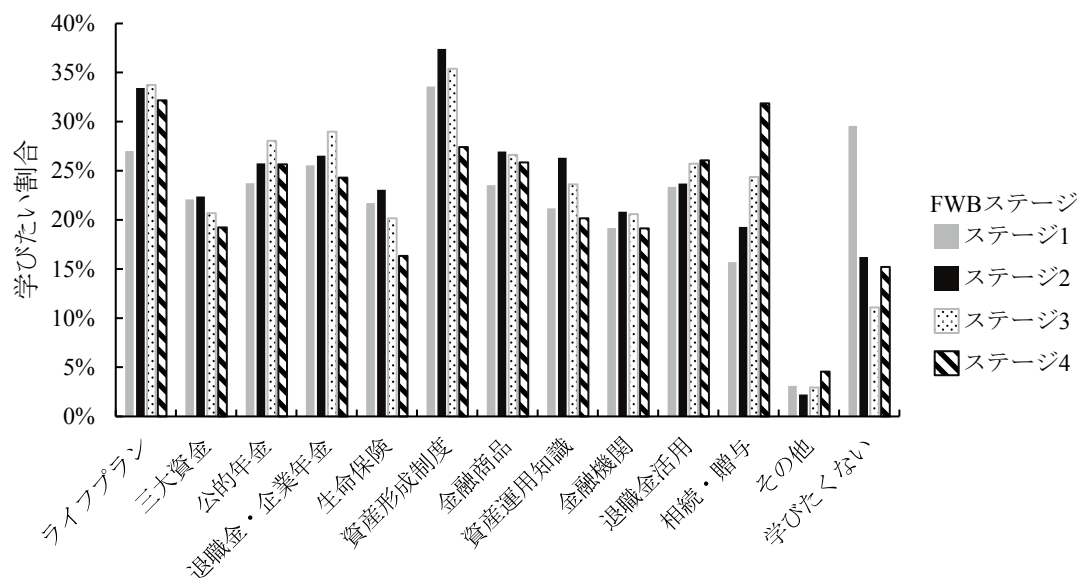
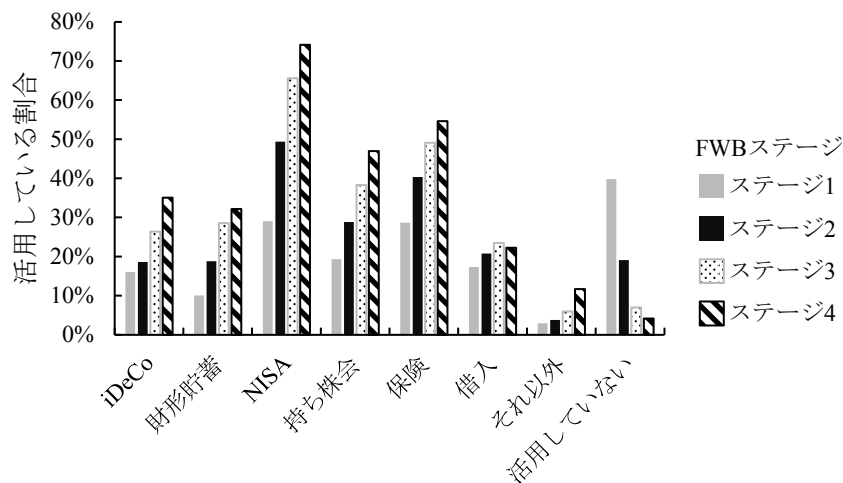


図6 FWBステージ別に見たマネープランに関する制度活用状況 (n = 8,500)



たものである。概して、FWB ステージとともに選択率が向上している。中でも NISA の上昇率は大きく、ステージ 4 では 7 割以上の人が利用していた。ステージ 4 ではすでに資産形成に関する制度を活用できていることから、前段の①②のような関心となっていたのであろう。また、「活用していない」の選択率がステージ 1 で突出しているのは、前段の③と一致した特徴である。ステージ 1 と他ステージを比較すると、金融に関する関心や行動という観点において大きな隔たりがあるように思われる。

(2) FWB が高い人は投資行動にも積極的

FWB が向上するとともに特に NISA が活用されていたが (図 6)、実際投資への行動が積極的であるようだ。「保有する金融資産額のうち、投資性資産が占める割合」を尋ねた設問において、投資性資産が「0 - 25%」「25% 超」「わからない」と回答した人の割合⁶⁾と資産階級の間隔を、FWB ステージごとに表したのが図 7⁷⁾である。ステージ 2 から 4 では、資産階級が上がるごとに投資性資産 25% 超の割合が増加していくことがわかる (図 7 (B) (C) (D))。さらに興

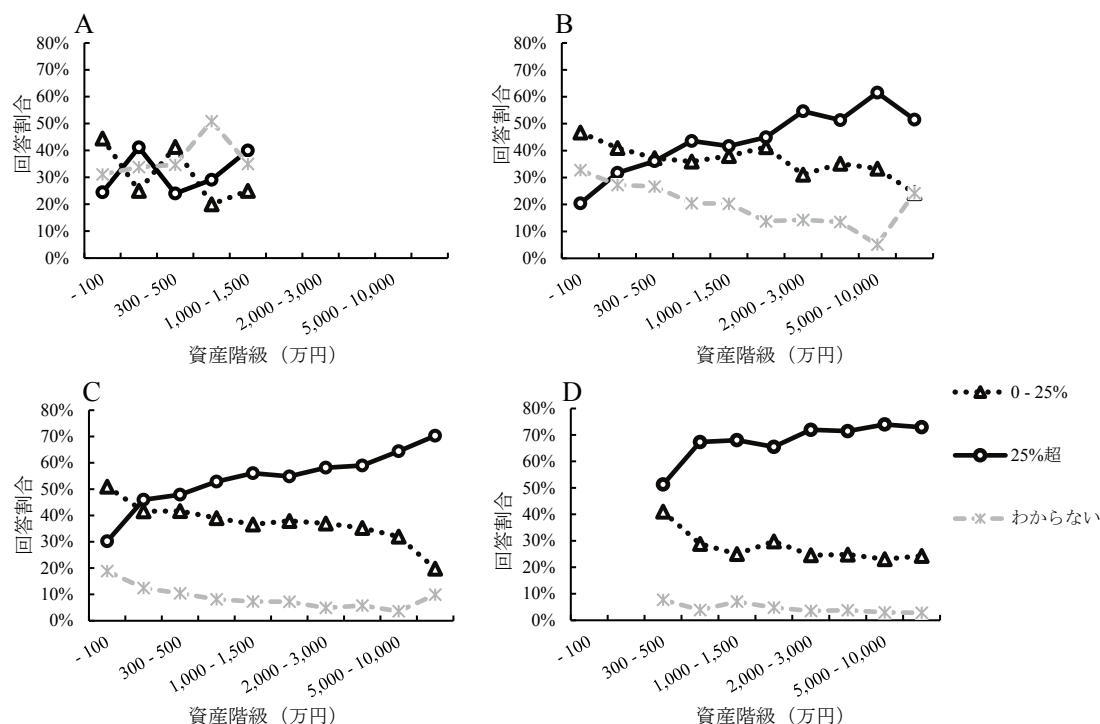
味深いことに、資産階級が同じでも、FWB ステージが高いほど投資性資産 25% 超の回答率が高くなっている。ステージ 4 では、資産階級の低い段階でも 70% 近くの人で投資性資産が 25% 超になっている。「FWB が高い」=「保有資産が多い」から投資をしやすいのではないようである。FWB が高いことで積極的にリスクを取れる側面もあれば、投資性資産により将来に向けて順調であると感じ FWB が高い側面、双方の影響があるだろうが、いずれにしても FWB が高い層は投資に積極的であると言えるだろう。

一方で、ステージ 1 (図 7 (A)) では「わからない」の回答率が非常に高い。金融への関心、制度の活用状況に加え、自身の経済状況の把握という観点でも、他ステージとは大きな隔りがあるようである。

6. 総括

本稿では、日本の企業勤務者における FWB について、基本的な属性との関係から行動に至るまで、さまざまな角度から特徴を分析・考察してきた。FWB が低い層というのは「自身の現状を把握すべき段階」であると言えるのではな

図7 FWBステージ別に見た資産階級と投資性資産割合 (n = 6,959)



(A) FWBステージ1、(B) FWBステージ2、(C) FWBステージ3、(D) FWBステージ4。

いだろうか。将来に向けての生活設計や資産形成ももちろんであるが、家計はどうなっているのか、自分はどのような資産を持っているのかなど、現状についてほとんど把握できておらず、把握する意欲も持っていないようである。FWBが中程度になってくると、「資産形成を進める段階」となるようである。この層は資産形成の制度活用は道半ばであるものの、学習意欲は最も高い層であった。そしてFWBが高い層は「資産活用を考える段階」となってくるようである。すでに資産形成まで順調に進んでいるため、その資産をどう活用するのかに関心が移っていた。FWBの段階により支援すべき内容・学習したい内容が異なることは、金融教育を自分ごと化する上で重要となるであろう。

本稿で考察してきた個人のFWBは、企業・社会の活力にもつながると考えられる。筆者らの研究では、従業員のウェルビーイング偏差値

(FWBを含む総合的なウェルビーイングの指標)が高い企業ほど、2年後の売上高が向上することが示唆されている(小澤, 2025)。本稿が国民全体のFWB、ひいてはより豊かな社会の一助になれば幸いである。

【注】

- 1) 金融経済教育推進機構 (J-FLEC) HP「Mission & Vision」より引用
- 2) THE ANZ ROY MORGAN FINANCIAL WELLBEING INDICATOR. QUARTERLY UPDATE DECEMBER 2024
- 3) 個人年収の該当する階級を問う設問。「わからない、または、答えたくない」を選択した者は分析から除外した
- 4) 保有する金融資産額の該当する階級を問う設問。「わからない、または、答えたくない」を選択した者は分析から除外した

- 5) 各変数を標準化して計算される偏回帰係数。従属変数に対する各独立変数の影響の大きさを表す
- 6) 各資産階級における、回答者の割合。注4) の設問において「金融資産はない」「わからない、または、答えたくない」を選択した者を除く
- 7) FWB ステージ・資産階級の組合せのうち、サンプル数が20未満の組合せについては除外している

【参考文献】

- ANZ, 2018, 「2018 Adult Financial Wellbeing Survey」
- ANZ, 2021, 「2021 Adult Financial Wellbeing Survey」
- Atkinson and Messy, 2012, 「Measuring Financial Literacy: Results of the OECD / International Network on Financial Education (INFE) Pilot Study」, OECD Working Papers on Finance, Insurance and Private Pensions No. 15.
- CFPB, 2015, 「Financial well-being: The goal of financial education」
- CFPB, 2017, 「CFPB Financial Well-Being Scale」
- MaPS, 2020, 「The UK Strategy for Financial Wellbeing 2020-2030」
- OECD, 2012, 「OECD/INFE HIGH-LEVEL PRINCIPLES ON NATIONAL STRATEGIES FOR FINANCIAL EDUCATION」
- 小澤, 2025, 「従業員ウェルビーイングと企業業績の分析」, MUFG 資産形成研究所調査レポート

おざわ りょうすけ

【経歴】

京都大学総合人間学部卒業、京都大学大学院人間・環境学研究科修了、大阪大学大学院生命機能研究科修了。博士(学術)。日本学術振興会特別研究員(PD)を経て2023年三菱UFJ信託銀行入社、同年よりMUFG資産形成研究所研究員。

【論文】

「データで読み解くファイナンシャル・ウェルビーイング」 MUFG 資産形成研究所レポート(2024年8月27日)
「従業員ウェルビーイングと企業業績の分析」 MUFG 資産形成研究所レポート(2025年3月26日)
